

(宗) 昌光寺  
住職・看護師

PICK UP

THE PERSON

# 南 千代

KEY WORD

## 命

— inochi —

33年看護師として医療の現場に立ち、救急外来・内視鏡検査・手術前後等の様々な患者や家族の抱える苦痛・不安に寄り添ってきた南住職。看護での心のケアに加えて宗教的援助が必要と考え、仏門に入り住職となった現在でも看護師の仕事と両立させている。医療は合理的。命を生かすことを目的とする。治療が途絶えたら医療の現場から自宅へという時代もあったが、緩和医療が進歩してきたことに安堵している。しかし、多死社会に突入しているにもかかわらず病床は減少しており、医療機関で最期を迎えられない時代になりつつある。他方、在宅医療・在宅緩和ケア・在宅看取りが進んでいる。現在国内では人生の最期を迎える施設として、牧師、神職、僧侶がいるシェアハウスがあり、全国各地にますます拡がっていく時代を望む。



「人の心を癒し救うのは人」

「黙って傍にいてくれていても魂と心が行き来する不思議な力」



住職・看護師

南千代

看護師であり、真言宗大覚寺派「昌光寺」の住職。「東北大学」実践宗教学寄附講座修了臨床宗教師や、メンタルケア心理士、消化器内視鏡技師、日赤特別研修修了日本防災士機構防災士、救急救命士などの資格を有し、現在も各地の講習会へ出向いて見聞を広めている。



宗教法人 昌光寺  
徳島県板野郡上板町字坂東 465

献身的に母を看護しました。子供2人一家5人の大黒柱である私は、母の看病のために仕事を辞められず苦しみました。退院している間は家族で過ごせる幸せを感じ、母の入院先の病院と勤務先の病院を昼夜の勤務毎に往復し、自宅で睡眠はしたことがほとんどない状態で、学校の弁当作りのためだけに帰宅し仕事へ看病へという日々を繰り返しました。家族共倒れにならずに済んだのは、子どもたちと父が頑張ってくれたからです。そのころ私は緩和ケア研究会に入会し様々なことを学び、それを生かして広めていきたいと願っていました。当時、宗教的な看護がWHOの健康の定義に追加され、欧米では病院にチャプレン（牧師）が常在しスピリチュアルケアがなされています。私は父母、患者さんの看護の中で気づかされた「人は人で癒し癒される」という信念をもとに看護行為、巡視などの時間に僅かな時間3分でも、様々な感情、仕草から心情を理解しようとし笑顔をもって傾聴してきました。「患者さんも父母も同じ姿勢」で少しでも心身が安らかなればという姿勢を継続してきました。それらの経験と自己研鑽を積み重ねることがで

# 全ての出会いと命に感謝し、 真摯な姿勢で人々の人生に寄り添う

看護師として医療に従事すると共に、真言宗大覚寺派『昌光寺』の住職として寺務を行っている南住職。長年、患者の心のケアに尽力してきた中で、仏教の教えの中には看護と通ずるものがあると感じたという。本日は、住職のもとを俳優の志垣太郎氏が訪問。人に尽くすという確かな信念を持って歩んでいる住職に、お話を伺った。

——南住職についてお聞かせ下さい。

現在は住職と看護師をしています。看護師を志したのは祖母の影響です。昭和49年12月、私が中学3年の高校受験の願書提出を控えていた時期に、祖母が寝込んでしまいました。家業が忙しい叔父叔母に代わり、両親が一時預かり世話をする事になりました。そして妹2人の世話や仕事を忙しなりました。NHKの朝の連続ドラマを観ながら、明治時代中後期に生まれた祖母が江戸時代生まれの両親や人々のことを語ってくれることを私は楽しみにしていました。ある日のこと、祖母が私に「看護師になつてくれへん」と言ったのです。

——お祖母様はきっと、献身的に世話をしてくる住職を見て、看護師になつてほしいと思われたのでしょうか。

でも私には美容師になる夢がありましたから、「考えてみる」としか言えませんでした。母と一緒に美容院に行く時、お客さんはみんな笑顔で幸せそうでしたし、人と人の心を美しくする仕事が好きだったので。介護させていた祖母も美しくなると喜び、お正月を迎えるのを楽しみに色々語り合いました。そして回復した祖母は、大晦日の昼に「千代ありがとう。ようしてくれた」と両親の留守中に実家へ帰つてしまったのでした。両親が戻り祖母のもとへ向かいましたが、そこにいたのは一人寂しく今世から旅立っていた祖母の姿でした。もつと祖母を止めればよかった、看護師になることを真剣に考えたらよかったと、取り返しのつかない後悔と悲しみのどん底に陥りました。私は祖母の亡骸を、両親と医大生のいとこと共に清めました。そして看護師を目指すことを祖母に誓いました。この経験があれば私は看護師になつていなかっただけでしょう。進学して看護や医学知識を深め、20歳から33年間同じ病院で看護師をしてきました。私の子ども2人にはその経験を語り、2人

とも両親の看護をしている私の姿から同じ道を選ぶことになりました。1人は育児休暇中ですが、看護師として働いています。祖母の魂を感じています。

——お祖母様への思いが、医療の道へ進むきっかけとなったのですか。

そうですね。父のことについて触れたのですが、私の父は51歳の時に軟骨肉腫を患い、右肩甲骨鎖骨上肢切断なくして生はないと告知を受け、家族は路頭に迷いました。しかし、父は勇敢で即座に受け入れられました。看護する私たちへの「助けては本人のためにならない」との厳しい看護師の言葉に、反感を覚えた瞬間もありました。右側は肋骨しかない障害を全く隠そうとはせず人のために何かできないかと考えていた父。装具はとも重量があるため装着を諦め何もつけず、障害があることが自分自身であると受け止めに前向きな姿勢で障害を乗り越え克服し、見事に社会復帰した父の姿、その父を支え続けた母を心から尊敬しています。障害に弱音を吐かず几帳面に施しをしてきた父は私の誇りです。医療におけるAI技術の進歩に期待する気持ちは大いですが、「人は人で癒し癒される」という信念も持っています。人の辛苦を理解し人を思いやり、全身全霊で受け止め大切にしようとする心のケアに期待を寄せていますし、現在も進めています。

——お父様は障害を自分らしくと捉え、強く生きていらつたのですか。

父はリハビリに励み、右腕がないことを忘れるほど、もとの元気を取り戻して障害を克服してから夫婦でよく旅行に出掛けていました。命といのちである魂が共に生きていることに感謝し、前向きに生きていくために、また母の命の終わりが来ることを予感したかのように、8年後に64歳を迎えた母は癌を患い、4年7カ月間にわたる闘病生活を強いられ、抗がん剤・手術・抗がん剤の入院を繰り返す中、父は片腕の体で

きたことを感謝しています。母は自宅死を選び、在宅介護により家族で看取りました。

——お母様、そして患者さんの心のケアに尽力してこられたことが窺えます。

母の死から3年後、再びの闘病に父は襲われました。成人して看護師になった2人の子ども、長女は嫁ぎ家族は3人になりました。母、私たちを守ってくれた父、24歳で事故が原因で右手を、54歳でさらなる障害を抱えたにも関わらず見事に立ち直った父。弱音を吐かず「世話になるな、ありがと」と笑顔で勇敢に生きた父への恩返しへの思いは長男長女も同じでした。曾孫4人を抱いた時、「どんな子になるかな」と喜んだ父。私は長年の職場を早めに退職して近い将来に向けて少しでも父の側に寄り添い看取らせていたため、僧侶の修行を終え帰ってきました。その後は非常勤看護師として復職し、副住職として父の世話ができる毎日に感謝していました。父は「くちなす半生前に、帰りが遅くなつた私にさし、親をほつとくんか」と告げました。私は母と父を抱き寄せ抱き締めました。右肩甲骨上肢がない父と私は頬が並ぶ現実胸が締め付けられ涙が溢れ、「ごめん。寂しくて不安だったんやな。ほんま言葉言わして悪かったな」と。頬を合わせたままの眼を閉じ咽び鳴きの声で言葉がでない父。父は幾度にもわたる長い辛苦、私たちが受けなければならなかった病まで引き受けてくれたのです。申し訳ない気持ちを抱くと「ほんなんかんまん」と首をふつていた父。「お母さんと爺さん婆さんが迎えにきてくれた」と私に告げた父。父が他界し父の友人から「あいつはわしに似て根性があるんじや」という父の心を知りました。父は母と叔父、祖母と共に私をいつも見守り、数々の危機から救ってくれています。両親には私の命を授けてくれたこと、そして私が子どもたちへと命をつなげたことに、感謝してもきれません。祖母、母叔父、父の看取りと体を清めさせていただき感謝



志垣太郎 (俳優)

「とてもお話ししやすい雰囲気の南住職。私も対談中、普段話さないようなことも自然に話すことができました。そんな住職を慕い、病院では多くの患者さんがお話をするために住職のもとを訪れるそうです。対談を通じ、長年「一人でも多くの人の苦しみを和らげたい」という強い想いで人々に尽くしてこられたことがよく伝わってきました。自分の人生を見つめ直せるような、素敵な時間を過ごさせていただきました」

じたことは、患者さんと患者さんのご家族とその気持ちは同じであると体と魂と深く感じています。副住職・住職として看護師として存在することは退職の時から考えていました。

——詳しくお聞かせ願えますか。

傾聴により緩和ケア・スピリチュアル看護をさせていたことが、私の大きな気づきの中で、「坊さんのような看護師さん」と私に気付かせてくれた方々、「先生と自分の最期の迎え方を話し合うことができて感謝しています。南さんの事はこれからも一生忘れない」と言ってくれた方に「私も看護師になつて良かったと思わせていただきました。私も一生忘れません」とお互い手を握り合いながら涙で声にならない声。多くの方々や肉親への心身魂の悲嘆に寄り添う傾聴やケアの実践などの経験から、様々な教えをいただきました。死の恐怖、魂の辛苦、悲嘆には薬や手術ではなく「人は人で癒し癒される」「一人ひとりを敬う人の心、人の心を大切にすること」の心、魂の感情・悲嘆に寄り添うことと考えています。看護と宗教的・霊的（スピリチュアル）をつなげるという信念を持ち続けてきた私は、東日本大震災を契機に始まった『東北大学』実践宗教学寄附講座と出会うことができ、そして「臨床宗教師」を修了することができました。それは、様々な方々にお教えいただいたことからこそであり、住職・臨床宗教師・看護師として、看護・宗教的・霊的（スピリチュアル）な立場で恩返しをさせていただくために精進し努力をする場である自身を引き締めたいです。私たち人間はそれぞれの立場で互いに「人の心身として魂のリレー」をして「感謝し合う」ことで成り立っているのです。私は両親に次いで、そして子どもたちから見たら次に今世を去るのは私の番です。今世を去つた子どもたちの父親に両親に感謝し「魂のふれあい、魂のリレー、感謝」を大切にしていきます。本日はありがとうございました。合掌